

大伴旅人論

—妻を偲ぶ歌を中心にして—

An essay on Tabito Ohtomo

—Taking the central point of the Japanese style poem on his wife

長友 武

初めに

大伴旅人は、万葉集の編纂者である大伴家持の父であり、万葉集を代表する数人の歌人の中の一人である。大伴旅人の生まれた家庭環境すなわち、武門として奈良時代を支えた大伴一族の栄枯盛衰を背景にして、いかに彼が生きたのかまた、彼が赴任した太宰府での山上憶良・沙弥満誓らとの文学的交流を考えその苦悩を浮き彫りにしたいし、また彼の最愛の妻大伴郎女の突然の死が彼にどのような影響を与えたのかを探ってみるのが主題である。彼の万葉集に残されている歌数は、約七〇首に及んでいるが、その歌を大きく分類すると次のようになる。

- (一) 酒を褒める歌一三首
- (二) 亡き妻を偲んでの歌
- (三) 九州の松浦地方を中心にしての巡行の歌
- (四) 山上憶良との文学的交流を中心にした太宰府歌壇での歌
- (五) 太宰府赴任前の奈良の都での歌

これら多くの旅人の歌の中で、(二)の亡き妻を偲んでの歌を中心に旅人の人間像に迫ってみたい。

I. 大伴家の歴史

もともと、大伴氏は古代の5世紀頃大伴室屋が、三千人の軍隊を率いて宮廷の警護に当たっていた家柄である。室屋の長男である談は雄略天皇の時代に新羅討伐軍の大将として戦死している。また、談の孫にあたる狭手彦、その人は旅人の曾祖父の弟にあたる人だが、その狭手彦と妻の松浦佐用姫とのロマンスは現在まで語り継がれ佐用姫は佐賀県田島神社で祭られている。大伴氏は、朝鮮半島との武力外交に金村の時代に活躍し九州、朝鮮半島に大変な勢力を持つていたと思われる。金村の子磐と狭手彦の軍隊は、太宰府の始まりである「那津宮家」を駐屯地として活躍している。だから、七二七年に太宰府の帥として九州に赴任の機会を得たのは運命的なものがあったに違いない。

丁度、斉明天皇が筑紫の宮で逝去され、百済の救済に失敗した白村江の敗戦の翌年天智四年(六六五年)にこの世に生を受けている。恵まれた武門の中で育った彼は、和銅四年(七一一年)、四七歳の時従四位下に昇叙。また、和銅四年(七一四年)左將軍に任命されている。彼が五〇歳の時であった。この頃から中央の政界の重鎮となり周囲から注目されるようになった。翌年彼が五一歳になった時靈龜一年(七一五年)に従四位上に昇叙され中務卿に任官している。

その時、彼が頼りにしていた父安麻呂がこの世を去り独り立ちを余儀なくされた。父の死後三年たった養老二年（七一八年）に中納言に任官している。この中納言という地位を得て父安麻呂、祖父長徳と同じように議政官の一人として活躍する機会を得ている。その頃、武門の大伴氏にとつては藤原一族が次第に力を持つてくるのが気掛かりなことであつた。旅人と九州地方の縁について養老四年（七二〇年）その頃勇猛をはした隼人族が中央から赴任してきた大隅國の国守を殺すという事件が勃発した。その時、その鎮庄の任にあたる適格者が大伴旅人であつた。それで彼は、隼人持節大將軍に任じられている。その後二年間隼人族の鎮庄にあつた。この彼が隼人征伐に忙殺されている時に中央政界に於ては藤原不比等が死去し長屋王を中心として新体制が引かれた。長屋王は、大伴旅人を頼りにし旅人は長屋王を十分に補佐してきた。神龜四年（七二七年）六三歳の時太宰の帥に任官している。当時の太宰府は、九州全域を統括するとともに、朝鮮半島中国との外交交渉にあつた役所であつた。この太宰府で先に筑前守として赴任していた山上憶良を中心として沙弥滿誓なども参加して遠の朝廷の太宰府で文学サロンとも言ふべき筑紫歌壇が催されたのである。

もともと、武門の家系に生まれ育つた旅人であつたが我が国最初の漢詩集「懷風藻」にもその作品が見られるように、文人としての才能もこの筑紫歌壇で開花したのである。旅人に強い文学的影響を与えた山上憶良は、旅人よりも下の位の筑前守であつたがその位は別にして、遣唐使として当時の中国の最先端の文学的教養を受けた人であつた。漢詩や文選に通じ、万葉集を代表する家族思いの、家

庭愛を人生の最高の倫理とした憶良の生き方は、旅人の歌や生き方に大きな影響を与えたのではないか。太宰帥に任官してから翌年、神龜五年（七二八年）に彼が六四歳の時長年連れ添つた糟糠の妻大伴郎女の死去に遭遇している。この人生最大の不幸、その悲しみを癒すために、酒と作歌に没頭したのである。おそらく、当時旅人の周辺にいた山上憶良達は、この旅人の晩年の不幸に対して心からの同情の念を持つたのに違いない。また数限りない慰めの言葉もかけたのに違いない。その頃中央での政界に於ては、旅人の信頼していた長屋王が政治的に失脚をする。旅人にとつては妻を亡くした悲しみと、長屋王失脚による混乱との両方に苛まれたのである。天平二年（七三四年）彼が六六歳の時に、当時中国から移入された梅花、

この梅の花は今では、桜とともに日本を代表とする和歌に数多く詠まれた花ではあるが、その当時の人々にとつては物珍しい花であつた。この梅花を愛でて花の下で「梅花の宴」が、旅人主催で行われている。この梅花の宴は、中国の書聖・王羲之の詩会と同じような形で行われている。全体で三二首程の歌が詠まれており、参加者は山上憶良を中心にして三二人程参加している。この梅花の宴が、旅人にとつては、前に述べた二つの悲しみを癒す最高の慰めとなつたのではないか。またこの年、旅人は、彼の曾祖父の弟である狭手彦が愛妻の松浦佐用姫を残し任那に旅だつたと言われている松浦地方を巡行している。夫の狭手彦の船の見える山の上に立つて船が見えなくなるまで領巾を振つて、あまりにも長い間領巾を振つたために石になつてしまつたという、美しい伝説が「肥前風土記」のなかに出てくるのであるが、その伝説のもととなつた狭手彦が偶然にも自

分の祖先であると知って、彼が言葉に言い尽せない感動を懐いたことは想像に難くない。松浦巡行の後大納言に任官し帰郷している。

松浦巡行の時にも足に腫れ物ができ歩行にも困難をきたしていたのであったが、天平三年（七三二年）従二位に昇叙された後病のため六七歳の生涯を終えることになった。旅人の一生は、一方では武門として生まれた大伴家を守り、政界での藤原氏との確執にもめげずに彼の政治的理想を追い求めた。また、一方では、文人としての才能を十二分に開花させ筑紫歌壇とも呼ばれるサロンを強固にし、山上憶良を初めとして多くの歌人の友人を持ち長男の大伴家持にその文学的理想を継承させ、その子家持は父の期待通り国守の地位に甘んじながらも日本を代表する歌集「万葉集」の編纂を完成した。旅人の一生は、二つの仕事、政務と作歌に情熱を燃やしたわけで、近代明治の作家、森鷗外が医学と文学の世界でまた、夏目漱石が英文学研究と多くの作品を残したと共通している。

II. 旅人の歌を中心にして

岩波古典大系の「万葉集」を参考してみると、約七〇首程の歌が見られる。その代表的な歌を提示し彼の作風を見てみる。全体の歌を見てみるに最愛の妻の死の悲しみがいかに偉大なる政治家旅人に大きな悲しみを与えたがよく分るし、妻の死後の歌が彼の歌のほとんどをしめるのである。

- 沫雪のほどろほどろに降り敷けば平城の京し念ほゆるかも
(巻八・一六三九)
- わが盛また変若めやもほとほとに寧楽の京を見ずかなりなむ

- (巻三・三三二)
- わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むたぬ
(巻三・三三二)

これらの歌に共通することは文化の都奈良を遠く離れて「遠の朝廷」である太宰府に来て奈良の都の美しさや秀囲気の良さを偲んで作った歌であるが、当時の他の歌、例えば、「梅花の宴」をともにした小野老

- あをによし寧楽の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり
(巻三・三二八)

沙弥満誓の次の歌

- しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖かに見ゆ
(巻三・三三六)

に見られるように奈良の都から太宰府に来た二人の歌人に共通する奈良の都に対する憧憬が伺われる。また、いかに太宰府に赴任していた歌人達が仲良く酒を飲みながら彼らの文学を語り合っていたことは次の山上憶良の歌でも理解できるのである。

- 憶良等は今は罷らむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ
(巻三・三三七)

何も形式張った公式の宴会の「梅花の宴」ばかりではなくて、日常茶飯事の現代のサラリーマンに共通する、お酒を飲むことによつて仕事の悩み等を話し合う。時には上役の悪口でも言ったのである。しかし、痛飲した後その場を立ち去る時の退席のすまない気持を歌った歌がこの歌である。諧謔微笑の中に宮仕えの辛さを表現した歌である。この歌からして旅人・憶良・満誓・小野老等との間に

文学という強い絆で結ばれた万葉人の友情の強さが垣間見られるのである。この太宰府を中心にしての文学のサロンは酒を媒体として盛んに行われていたことが分る。それは中国の文人達が「文撰」や「遊仙窟」に見られる神仙思想や、隱遁思想の影響を受けたのと同じく旅人は酒を褒める歌一三首を妻の死後歌っている。代表的な歌は次のようなものである。

○ いにしへの七の賢しき人ども

欲りせしものは酒にしあるらし (巻三・三四〇)

○ 言はむすべせむすべ知らず極まりて

貴きものは酒にしあるらし (巻三・三四二)

○ この世にし楽しくあらば来む世には

虫に鳥にもわれはなりなむ (巻三・三四八)

○ 生者つひにも死ぬるものにあれば

この世なる間は楽しくあらな (巻三・三四九)

最初の三四〇番の歌は、古代の中国の戦国時代に於て、戦国の動乱から遠ざかり山深い竹林の中で酒を飲み琴を演奏し清談をしたという竹林の七賢人の説話を例にとり、酒に救いを求めないと生きて生けなかつた七賢人と最愛の妻を亡くした悲しみその悲しみを癒してくれるものは酒だという旅人のどうしようもない共通点が理解できる。文人である政治家旅人は自分自身が確執の激しい中央の政界から隱遁するかの如きこの太宰府で疲れを癒していたのではないか。彼は、根っからの政治的確執を好む政治家とは違い、心の平穩や安らぎを尊ぶ本来の人間性を好んだのではないか。当時の知識人の中にはこのような中国の隱遁思想に憧憬を感じる文人達も多かつたの

ではないかと推察される。

次の三四二番の歌は、政治的確執から来る心理的緊張状態や、最愛の伴侶である妻を亡くした悲しみその辛さや悲しみを払拭してくれるものは酒以外のものはない。直接的な表現でもって酒のありがたさ貴重さを歌い上げている歌である。

次の三四八番の歌は、現世享楽主義とも言うべき生きている瞬間、人生の間が酒を飲むことによつて楽しくあるならば次に生まれ変わる人生においては虫や鳥にでも私は喜んでなりました、仏教で言うところの輪廻の思想ともいふべき生命の輪廻を旅人は喜んで受け入れている。旅人はこの仏教の輪廻の思想を人生哲学として彼の中に快く受け入れたのではないかと思われる。三四九番も、悠久な変哲することのない自然それを背景にして与えられた人生を生きていかなければならない儂い存在の人間。旅人自身も自分をこの儂い人間の一人と考え、限りのある人生の間、妻の死という苦しいことは乗り越えてとにかく酒を生きる糧として生きていかなければならないという一種の諦観をも感じられるのである。太宰府在任中の最後の年には、「梅花の宴」に於て旅人を初め大式以下府の官人二二名管内である九国三島の諸国からは、筑前国守山上憶良を初め国司等十一名、合計三十二名が参加している。その中に会の主人としての旅人の歌

○ 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

(巻五・八二二)

○ 我が盛りいたくくたちぬ雲に飛ぶ葉食むともまた変若めやも

(巻五・八四七)

「梅花の宴」に於て重要な主人の役を務めなければならない旅人が、当時の珍しい（中国からの輸入された）梅の花のさらさらと散る様子を見て自分の人生の終焉の近いのを悟ったの如き歌である。

確かに人間の命には限界があるもののその終焉がより近くなると、人間の持つている感受性はより鋭敏なものとなると思われる。梅の花が散る季節、旅人の館で落下する様子の美しさが歌われた歌であるが、この歌の中に自分自身の歌の終焉というものをまるで予知するかの如き凛々しさに満ちあふれたものである。次の八四七番の歌においては、葉草などに生命の延長を頼ろうとする風潮に対して嘲笑を加えているような気がする。生命というものは必ず終焉があり、それはいかなる業や医術でもつても避けることはできない。それを実感した歌である。更に、「梅花の宴」に於て今までの人生の終焉を予知するが如き歌と違い、生命の躍動感すばらしさを歌い上げた歌が二首である。

○ 松浦川川の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ

（巻五・八五五）

○ 松浦なる玉島川に鮎釣ると立たせる子らが家路知らずも

（巻五・八五六）

この二つの歌は、まるで一枚の絵のような松浦川で釣りをする娘達の健康なエロティシズムを我々に感じさせる歌である。妻を亡くした悲しみを健康な農村の娘の美しい姿を描くことによつて、その悲しみを自分自身に忘れさせ、空想の世界に遊んだ歌である。旅人自身を（蓬客のさらに贈る歌三首）蓬客のというユーモアに満ちた蓬の下にいるような卑しい旅人であると、言っている。当時の結婚

形態の妻訪婚の様子が伺われる。八五五番の（裳の裾濡れぬ）という表現は室町時代の庶民の間に流れた俗謡にも見られ女性の着物の裾が濡れるとこの事は生命そのものを感じさせる表現であり現代の歌謡曲等にも多く取り入れた表現形式の歌である。

そして、

○ 万代に語り継げとしこの岳に領巾振りけらし松浦佐用姫

（巻五・八七三）

○ 海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしける松浦佐用姫

（巻五・八七四）

○ 行く船を振り届みかかぬいかばかり恋しくありけむ松浦佐用姫

（巻五・八七五）

「梅花の宴」に於て、旅人が一番に強調したかったことは太宰府の梅などの美しさや、夫婦の永遠なる愛いつまでも変化することのない愛、その愛の姿を松浦佐用姫と旅人の祖先である大伴狭手彦との美しい夫婦愛に求めたのではないか。この八七三番と八七四番、八七五番との歌は夫を見送る貞節なる妻の美しさが描かれ一枚の絵のようなものを読者に感じさせる。

ちなみに、著者私の専攻とする琉球文学に於ても琉歌

○ 三重城のぼて手巾持上げれば走船のならひや一目ど見ゆる

（琉歌大観・五五三）

というように妻が速船に乗つて薩摩に向かう夫をいつまでも見送つている美しい姿が歌われている琉歌である。この様子を踊りにしたのが琉球舞踊の「花風」という踊りである。旅人の松浦佐用姫を讃えた二つの歌は、江戸時代盛んに交流された日琉との文化交流のお

かげでこのような美しい琉歌を生み出したことになる。

これら松浦佐用姫や松浦川で釣りをする村娘との仮想の懸想をする旅人の歌は中国での「遊仙窟」等に政治的確執や人生の苦しみを癒した唐の文人達の生き方に共通する。中国の詩人である李白や杜甫達も同じような心境を作り出し杜甫は飲中八仙歌を作っている。旅人はこれらの文学手法を取り入れたに違いない。

この松浦地方の美しい自然や伝説は太宰府で政務をとっていた旅人にとっては安息の場所であつたのではなからうか。それは奈良の貴族達が立田山・象の小川・芳野の滝・佐保の山等のような景勝の地に遊ぶことによつて彼らの安息の地を得たのと同じである。特に佐賀県の松浦地方は朝鮮半島との交流も盛んであり唐ぶりの文化を好んだ旅人にとつては忘れ得ぬ土地だつたのではないか。旅人は太宰府を去るにあたり次のような歌を二首残している。

○ 倭道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島思ほえむかも

(巻六・九六七)

○ 大夫と思へるわれや水荃の水城の上に涙拭はむ

(巻六・九六八)

これら二つの歌は、遊女である娘子から送別としての餞として受け取つた歌の返歌である。遊女の歌は次の二つである。

○ 凡ならばかもかも為むを恐みと振り痛き袖を忍びてあるかも

(巻六・九六五)

○ 倭道は雲隠りたり然れどもわが振る袖を無めしと思ふな

(巻六・九六六)

前の二つの歌は旅人が太宰府を去つて都に向かう時の歌であらう

が、遊女が旅人に対して「袖を振る」それに対して旅人が答えた相聞歌の歌である。その中で実際遊女との交渉はなかつたであらうに、

その遊女の歌に対して二首に及ぶ返歌を載せている。どうか気をつけて大和へ御無事にお帰りください、という二首に対し吉備の児島を通つて行くならば児島という字の遊女である児島を思い出すに違いないと、九六七番の歌で歌っている。また九六八番の歌に於ては、太宰府の長官まで務めた大物官僚である旅人は遊女との別れに際し水城の上で涙を拭っている。いかにも遊女との別れに涙している大物官僚旅人の悲しみが歌われているようだが、この遊女とのやりとりは彼一流の諧謔趣味であつて文学の世界に遊んだ彼の足跡である。これら二首の遊女との交流の歌からして旅人は九州の地であらゆる階層の人達との交流を愛し下々の人達の気持ちを汲んだ心優しき大物官僚であつたのではなからうか。

Ⅲ 亡き妻を偲んでの歌

六三歳の年齢で神亀四年(七二七年)に太宰府の帥として赴任した旅人は、前にも述べたように翌年六四歳の時に妻の大伴郎女を亡くしている。彼が亡き妻を偲んで作つた歌は一〇首程残されている。この糟糠の妻大伴郎女の人柄については私なりに旅人の歌から想像して見ると、夫旅人に陰で仕え、決して表面には出ずに二人の子供である家持達を育てあげた心優しき女性であつたのではなからうか。前にも述べたように太宰府の地で歌を通して万葉集を代表する人生歌人の山上憶良と特別な親交があり、憶良の人生観は旅人のそれと一致していたのだと思う。最愛の妻郎女がこの世を去つた時の悲

しみを歌にした旅人を、憶良は温かく見守っていたのではないだろうか。

○ 愛しき人のまきてし敷たへのわが手枕をまく人あらめや

(巻三・四三八)

○ 還るべく時は成りけり京師みやこにて誰が手本をかわが枕かむ

(巻三・四三九)

○ 京なる荒れたる家にひとり寝ば旅にまさりて苦しかるべし

(巻三・四四〇)

最初の四三八番に於ては、恐らく死後すぐに詠まれたものである。うが愛しい人(妻の郎女)が枕にした夫の旅人の手枕にして、ともに寝る人がまたとあろうか、ありはしない。はつきり言つて妻以外の他の女性を今後愛することはないだろうという強い決意が伺われる歌である。四三九番と四四〇番の歌は、太宰府から京に近づいてきた時に誰も待つ人がいない奈良の夫婦でいた家で果たして自分は一人で生きていけるだろうかという不安を歌つた歌である。四三九番では、私の側に寝てくれる人は誰もいない、四四〇番の歌に於ては、二人が何十年もの間住み慣れてきた家に帰り独り寝をしなければならぬ私は、当時の社会で一番苦しいものの代名詞として扱われてきた旅それ以上に何倍も苦しいと果たして一人で生活ができるだろうかという強い不安を歌つた歌である。

奈良の都への帰途の途中で作つた歌が五首程ある。

○ 吾妹子が見し輶の浦の室の木は常世にはあれど見し人ぞなき

(巻三・四四六)

○ 輶の浦の磯のむろの木見むごとくに相見し妹は忘れえぬやも

○ 磯の上に根はふむろの木見し人を

(巻三・四四七)

いづらと問はば語り告げむか(巻三・四四八)

○ 妹と来し敏馬の崎を還るさに独りして見れば涙くましも

(巻三・四四九)

○ 往くさには二人わが見しこの崎を独り過ぐればこころ悲しも

(巻三・四五〇)

最初の四四六番の歌は、今の広島県福山市鞆町の入り江の室の木この木は、別名ハイネズの木とも言い海岸地方に多く霊木として信仰されている常緑樹である。旅人夫妻は奈良から九州への赴任の途中で長寿と福寿とをこの木に祈つた。しかし、ともに祈りを捧げた妻はこの世にいない。室の木という常緑樹(常往不変)の木に対して変わり易い人間の生命の儚さを歌い上げている。四四七番と四四八晩の歌は、四四六番の歌の気持を更に補足した歌である。生命の逞しい室の木それに対して病に倒れたか弱い妻を対照的に歌いあげている。

次に、四四九番の歌は、現在の神戸市灘区岩谷堂付近の景勝の地、敏馬の崎で、太宰府に赴任する時愛妻と手を取つてすばらしい景色の敏馬の崎を褒め称え、岬の茶店で二人で談笑したのだろう。それ故に奈良への帰任の途中に、旅人一人だけでその景色を見ると在りし日の妻の笑顔が心に浮かんできて涙溢れてくる。官界政界に於て激しい確執を乗り越えてきた旅人であったが、これらの歌を見ると妻をなくした衝撃が如何に大きいものであったかが理解できる。四五〇番の歌も、更にその気持を我々に印象づけている。

次に、故郷である奈良の旧居にやつとの事で帰り着いて次のような歌を三首作っている。

○ 人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

(巻三・四五二)

○ 妹として二人作りしわが山斎は木高く繁くなりけるかも

(巻三・四五二)

○ 吾妹子が植し梅の樹見ることこころ咽せつつ涙し流る

(巻三・四五三)

最初の四五一番の歌は、旅人自身の奈良への帰還を待ち侘びている妻のいない空虚な家に帰ることは、当時最高の苦しいものであった旅以上の苦しさであったと述べている。現代人が旅というものをグルメの旅とかショッピングの旅とか言つて、人生最高の楽しみとして考えているのとは異なり万葉人達は旅というものを人生の死と同じように苦しいものとして捉えていた。これに似た気持ちの現代のサラリーマン達は、彼らの赴任地で単身赴任をしなければならなかったために、夜など誰も待つことのない家に帰り旅人と同じ苦しみを味わっている。四五二番の歌は、太宰府に赴任する何年か前に愛する妻と二人で汗だくになって庭の中に作つた築山は、今帰つて見ると何年も手入れがされていなくて荒れ果ててしまつてゐる。あの元気で微笑に満ちた妻はもうこの世にはいない。一本一本の草木に対してそれらは妻と一緒に植えたのであろうが、その木を見る度に妻のことが思い出されてならない。如何に妻即女は旅人にとつて大きな存在であつたか理解できる歌である。同じような気持を次の四五三番の歌で歌い上げている。前にも述べたように、現代の日本人に

桜とともに日本を代表とする花木として印象付けられている梅、旅人はその梅を最も賞賛したのであろう。自分の愛する妻が植えた梅の木を見るたびに（心むせつつという表現を取りながら）歌つており更に（涙し流る）涙がこぼれ落ちる様を歌っている。これらの歌は彼が都に帰つてからの歌であるが、最晩年の時に妻を亡くした悲しみに旅人は耐えられずに一年あまりの生命が終つたのではなからうか。同じように梅を静かな気持で見ながら晩年を過ごした山上憶良は、次のような歌を作っている。

○ 春さればまづ咲く宿の梅の花ひとり見つつや春日暮さむ

(巻五・八一八)

また旅人は、憶良に対しこの風流の名残を惜しんで次のような歌を詠んでいる。

○ 梅の花夢に語らく風流たる花と吾念ふ酒に浮かべこそ

(巻五・八五二)

夢の中に現れた梅の花よ私は思う。ですから酒の盃の上に梅の花びらを浮かべて欲しいそしたら一緒に飲めるのに。憶良のこの歌は「梅花の宴」で歌われているのだが如何に当時の風流人の大伴旅人が彼自身の生涯を象徴している自分のような梅の木・表面はいかつい表皮をして大地にしっかりと根ざした古木しかし冬季の極寒にも耐え春に可憐な花を付ける梅それは旅人自身の人生の象徴であつたのではなからうか。

旅人の妻即女の死というものを旅人の文学上での師匠山上憶良は日本挽歌一首巻五・七九四番の長歌の中で憶良自身の妻が死んだかの如き形を取りながら長年連れ添つた妻の死というものを「には鳥

のふたり並び居語りひし心背きて家離りいます」というような表現をとりながら、長年二人で連れ添った片一方の妻が亡くなる悲しみを歌いあげている。その後反歌として五首程歌っている。

○ 家に行きて如何にか吾がせむ枕づく

妻屋さぶしく思ほゆべしも (巻五・七九五)

○ 妹が見しあふちの花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに

(巻五・七九八)

○ 大野山霧立ち渡るわが嘆くおきその風に霧立ちわたる

(巻五・七九九)

最初の七九五番の歌は、家に行つたところで私は何をしようか分からない。枕を並べている妻屋もきつと物寂しく思われることでしょう。直接的な表現は避けながらも旅人を待っている妻がもうこの世にはいない寂しさを歌っている。

次の七九八番の歌に於ては、愛する妻が見た「あふちの花」、この花は別名せんだんの花とも言うが四国九州地方に於ては四・五月ごろ薄紫の花が咲く。旅人が妻の死を悲しんで、旅人の涙がまだ乾かないうちに、妻の郎女が生前喜んで見たであろう旅人の家のせんだんの花も散ることであろう。せんだんの花の散る儚さに亡き妻の悲しみを添えて歌つたのであろう。憶良という人は悲しみに打ちひしがれている旅人に代わつて旅人の気持ちを素直に歌いあげたのであろう。同じような気持ちを旅人の長男の相伴家持は、家持の亡き妻を偲んで次のような歌を歌っている。

○ 妹が見し屋前に花咲時は経ぬわが泣く涙いまだ干なくに

(巻三・四六九)

父旅人と同じ悲しみを味わつた家持の心の中にこの旅人の歌が残つていてのことであろう。この七九九番で歌われている大野山は、太宰府庁の後ろに位置する山々でその山に立ちこめている霧それが妻を亡くしたという溜息を旅人が吐くことによつてあまりにも深い溜息のために大野山にかかつている霧が立ち分かれて行く例えでもつてその悲しみの深さを表現している歌である。これら七九五番から七九九番までの反歌は江戸時代までの万葉集研究家契らは山上憶良の妻を亡くした悲しみという風に解釈を加えているが、近代の歌人斎藤茂吉はそれは憶良の妻を亡くした悲しみではなくて友情の深い思いやりのある憶良の旅人になりきつての旅人の亡き妻の死を悲しむ歌と解釈するのが妥当であるといっている。私自身も同意見である。

大宝元年(七〇一年)四二歳の時、遣唐使として唐に渡り、晩年の神龜末年に筑前の守として太宰府に赴任した山上憶良は万葉集を代表する歌人でありその歌の素材が老いてゆく悲しみ、病によつて子供や親を亡くした悲しみ、貧しさの中で喘いでいる苦しみ、その様な心の中の葛藤を素直に歌いあげ人間としての本来の姿、倫理観を尊重した彼の作風はこの旅人に大きな文学上の影響を与えたに違いない。

相伴旅人と山上憶良に共通する事は男としての凛々しさ、強さ、名声欲を心の中では完遂しなければならぬと思ひながらも人生の様々なことに妨げられて、それができないと、前に述べた旅人の九六八番の歌に於て遊女の児島との別れに本来丈夫であるべき旅人ははらはらと涙を落としている姿が歌われているが同じような気持を

山上憶良は

○ 土やも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てずして

(巻六・九七八)

原文を読むと次のような詞書が書いてある

○ 右の一首は、山上憶良が沈痾の時に、藤原朝臣八束、河辺

朝臣東人を使はして疾める状を問はしむ。ここに、憶良臣、

報の語已に畢り、しまらくありて、涙を拭ひ悲嘆しびて、こ

の歌を口吟^{うた}ふ。

この歌は事実上辞世の歌であるが今はの際に官僚として名を後世にあげられなかつた憶良の無念な気持が伺われる。しかし、この時憶良の心をよぎつたものは前の九六八番の旅人の歌であり旅人への熱い思いを残しながら死んでいったのではなからうか。

奈良時代の初めより天皇家の護衛をしてきた大伴家の家名を背負つて武門の生まれとして生まれた旅人、彼の人間としての苦悩をこれら亡き妻を偲んでの歌で感じることが出来る。現代の階層社会の一つの歯車として生きていかなければならない官僚、これは古代に於ても同じであつたであろうが、あまりにも人間的情緒の勝つていた旅人の苦悩をこの章に於て私なりの感懐を持って、資料をもとにして述べてみた。

結びに

旅人の長男の大伴家持は越中の国守を初め、因幡国守、伊勢国守等を歴任。最終官位は時節征東將軍を勤め上げ七八五年八月陸奥国

多賀城で没した。家持は四七九首もの歌を万葉集に残しその編纂者としても有名である。家持の歌風は初期に於ては習作的類歌が多く晩年に於ては繊細な歌風で古今集での下地的要素をもつた次のような歌を作っている。

○ 春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも

(巻一九・四二九〇)

○ わが宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

(巻一九・四二九一)

○ うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独しおもへば

(巻一九・四二九二)

最初の四二九〇番の歌に於ては、万葉集のほとんどの歌が春という季節を最高の躍動の季節であるとしているのに対して家持は春の夕暮がうら悲しいつまり、春の夕暮が何となく悲しいものである。その夕暮に雲雀が鳴くことがなおその寂しさを助長していると言つ

ている。次の四二九一番の歌は、春の夕暮の時に自分の家の小さな竹やぶが春の風を受けてさらさらとかすかな音をたてる、そのことが佳しさを募らせていると歌っている。また四二九二番の歌では、春のうららかな日中に野原で雲雀が天高く舞いその声を聞くこと心悲しいと作者は歌っている。これら三つの歌に共通する春の夕暮に対する繊細な捉え方は、古今集の美意識である幽玄の初まりであり近代人の感覚それは今までの万葉集の骨太なそして実直な季節に対する捉え方とは大きく異なっている。これら家持の晩年の歌は父旅人の歌を念頭に置いてのことである。季節に対する感じ方は、父旅人の次の歌

○ 残りたる雪に交じれる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも

(巻五・八四九)

○ 梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ

(巻五・八五二)

最初の八四九番の歌は、平易な表現ながらも梅の花に対してまるで人間に語りかけるような調子でもって雪は降ってもどうか散らないで欲しいという繊細な心、それはまるで梅の花に心があるかのようには語りかけている歌である。また次の八五二番の歌に於ては、梅の花が旅人に対して前の歌の答えを歌っている。あなたのような風流を愛する人士の盃に花である私は浮かんでみたい。このような二首に共通する父旅人の繊細な技法をもった作風は着実にその子家持に受け継がれ古今集の発展を見たのである。

引用文献 : 万葉集一〜四

日本古典文学大系 岩波書店

: 風土記

日本古典文学大系 岩波書店

: 日本書紀上下

日本古典文学大系 岩波書店

: 懐風藻 文化秀麗集

日本古典文学大系 岩波書店

: 琉歌大観

沖縄タイムズ社